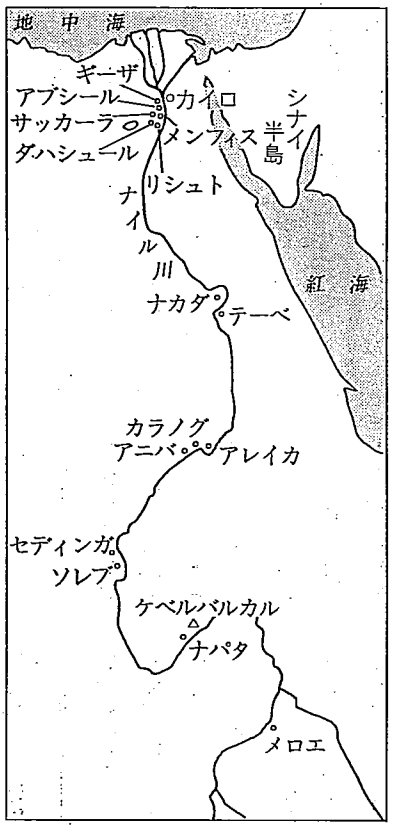
古代エジプトのピラミッドについて

ジャン・ルクラン
桜井清彦（訳）

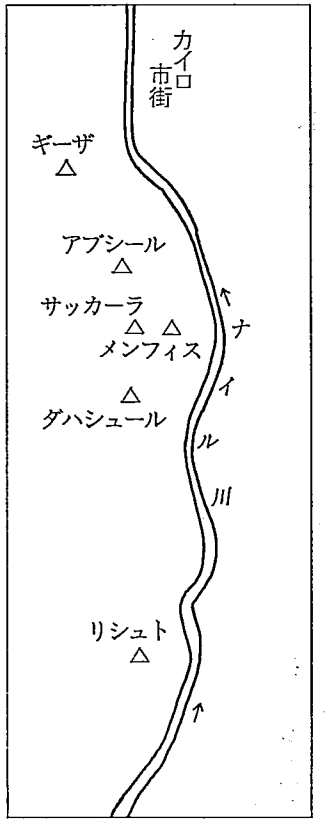
はじめに

エジプトのピラミッドは、世界で人間の残した最も知られた大建造物の一つに数えられる。この不滅ともいえる石の塊は、いつの時代を通しても、人々に賛嘆と驚異の念を呼び起こしてきた。すなわち、古代ギリシャ・ローマ人に始まって、アラブの歴史家、中世のキリスト教巡礼者、旅行者、学者をへて、ナポレオンの有名なエジプト遠征に至るまで、ピラミッドに関しては、尊敬と驚異、時にはある種の恐怖さえもが入りまじった解釈までが横行していたのであった。ところがごく最近では、現実と夢が非常に人間的に併置された素晴らしい例であるピラミッド――巨大な石塊であると同時に人間の夢あるいは幻影そのものでもある――が最も好ましいテーマとして、歴史物の劇画にまで取り上げられるようになってきている。

言うまでもないことであるが、サッカーラにある第三王朝（紀元前二六五〇年ごろ）の有名なジョセル王の階段ピラミッドや、第四王朝（紀元前二五五〇～二四七〇年ごろ）のクフ王、カフラー王、メンカウラー王たちのギーザに



古代エジプト遺跡地図



ピラミッド密集地帯概念図

して、ファラオたちは、現在のカイロ地方の西方のリビア台地の断崖の縁に沿ってピラミッドを建設したのである。これらは一〇〇キロメートル以上にわたって、七〇を超えるピラミッドが遺跡として残っているが、その多くは今日破壊されてしまっている。それはあたかも、人間の超人的な努力など一顧だにしない時が、人間の自惚れを無に帰せしめようと望んだかのようである。中王国時代（紀元前二一〇〇～一八〇〇年ごろ）になっても、ファラオたちは相変わらずピラミッドを建設したが、とくにリシュトに多かった。新王国時代（紀元前一五五〇～一〇七〇年ごろ）になると、よく知られているように、王たちの遺体は「王家の谷」の地下の墓室に埋葬されるようになった。もっとも、墓が奥深く埋

ある三つのピラミッドが最もよく知られたものであるが、しかし、ピラミッドはこれだけにとどまるものではない。古王国時代（紀元前二六五〇～二一五〇年ごろ）を通め込まれたのはたしかにこの地域であるが、しかしその意味するところは、遺体は巨大な自然のピラミッドともいえるテーベの西方の山のけわしい頂き、テーベ峰の地中に埋葬されたということである。有力者の墓地では、上に小さなピラミッドをいただくような形で墓が築かれており、これは、デル・エル・メディーナの石切場の所有者たちの墓地や、最近の発掘で判明したサッカーラの墓地や、あるいはアニバやソレブといった遠く離れたヌビアの地で発掘された墓地でも見られるものである。こうしてみると、時代が下って、エジプトの文明を模倣しようとしたスーダンのクシュ王朝の王たちが、まずゲベル・バルカル山の近くのナパタに、次いでメロエの三つの巨大な墓地にピラミッドを建設したのも奇異なことではいえない。こうして、皮肉なことに、エジプト本家よりもスーダンにかえって多くのピラミッドが残ってしまう結果となったのである。

階段ピラミッドについて

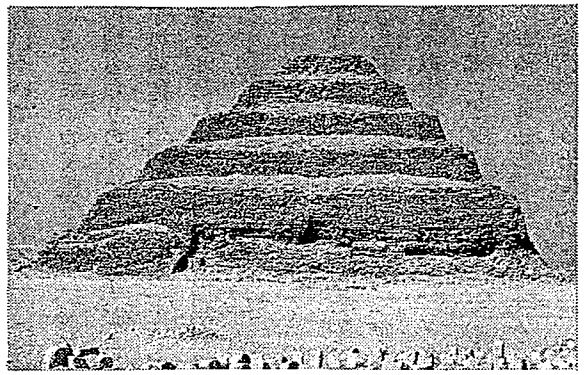
調査研究することを学問とする以上、考古学は本質的には、人間、つまり考古学者によってなされる人間的な学問といえよう。過去の遺跡は、学者たちによる骨の折れる努力によって蘇らせられないかぎり、人間の記憶や眼前に蘇ることはない。こうして、サッカーラの最も古いピラミッドは、同時にジョセル王とロエールという二人の人間の名と結びついている。つまり、ジョセル王は第三王朝のファラオであり、ジャン＝フィリップ・ロエールはフランスの建築家で、サッカーラの高原で五十年以上にもわたってジョセル王のピラミッドを掘り、修復し、そして歴史上の位置づけをすべく働いている人物である。考古学者として全エネルギーと活力を使う、根気のいる仕事がどんなものであるかを理解するためには、作業場で働いている彼を見る必要があろう。

サッカーラの階段ピラミッドは、人間の精神および技術に関して、重大な転換期を示している。最初の二つの王朝の時代（ティニス期、紀元前三〇〇〇～二七五〇年）には、王族の墓の上部構造は、割合としては小さな部分を占めるにとどまっていた。つまり、最大でも四〇メートルほどであったが、なによりも注目されることは、これ

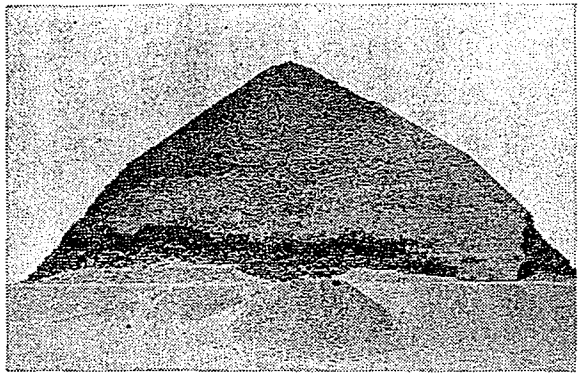
らが日干しレンガで建設されていたことであった。ジョセル王の統治下になって、階段をもった巨大できわめて複雑な構造のかの有名なピラミッドが切石でもって建設された。これによって一気に、エジプト人は最大の石造建造物の建設に輝かしい成功を収めたのである。この六段からなるピラミッドは、高さ六〇メートルにも達し、周壁は長方形をなしていて、広さは一五ヘクタール以上（五四四メートル×二七七メートル）にも及んでおり、前の時代に建てられたナカダの大きな墓と比べても百倍以上の広さを備えていた。このピラミッドを設計した建築家であり、ジョセル王の大臣でもあったイムホテップが、のちの時代に神と見なされるようになったのも当然のことであり、現代の建築家の間でさえも、最もすぐれた建築家で通っているほどである。稜堡状をなす長大な周壁には多くの入口がつけてあるが、それは象徴的なもので、実際の出入りには使えないものである。というのは、石塊に入口の絵が形どられただけで、永久に開くことも閉まることもないものである。周壁内部にはあらゆる種類の構造物があるが、大部分は、表面が盛り土で覆われており、人間が勝手に部屋や廊下に入ることはできない。これらは、王のお供をしてあの世に行く霊たちが使うためにつくられたものであって、人間が行き来するためにつくられたものではないからである。そう、実はこれらはまやかしの建造物なのである。宮殿には違いないが、永久に石の中に完全に閉じ込められた見せかけの宮殿なのである。

六つの段をもつこの階段ピラミッドに関しては、幾つかの建設段階が認められる。今日まだ、人間の労働と努力の気高い教えとしてわれわれを驚かせてやまないこのピラミッドも、結果として今に残るこの姿にたどりつくまでには、イムホテップの中にもさまざまな試行錯誤が繰り返された。まず、正方形の平面上にマスタバ墓がつくられ、これが拡張されていってピラミッドが誕生した。つまり、まず四二メートルにも達する四つの基壇からなる巨大な階段が築かれ、それがさらに拡張されてできた六段のピラミッドは、高さ六〇メートル、底辺の広さ一〇九メートル×一二一メートルにも達した。階段は天にいる神々に通じるとともに、神々が地上に降りることも可能ならしめることを示していた。人間と天上界とのこの交流は、高等な精神上の産物であることを表わしており、それがこのような石塊を積み上げさせる動機であったのである。ピラミッドには深さ二十八メートルに達する大きな井戸が隠されていて、底には、花崗岩でできたジョセル王の墓穴が配置されていた。この井戸から長い廊下が埋葬の間へと通じ、迷路をなす幾つもの回廊は、壁にはめこまれたファイアンス製の小さな板が青く輝く部屋へと通じていた。

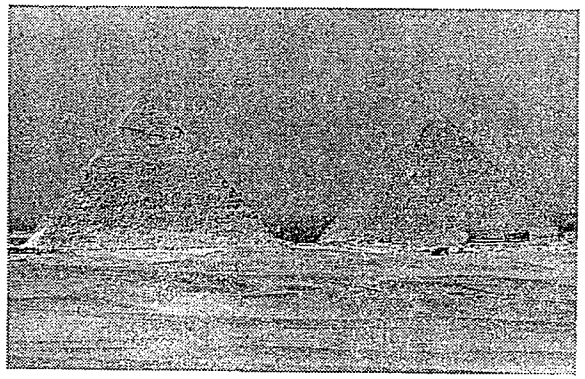
われわれは、非常に複雑な仕掛けを備えたこの建造物すべてを、当時の人々の精神風土に戻して考えることを忘れてはならない。彼らの精神風土には幾つかの信仰が



階段ピラミッド



屈折ピラミッド



ギーザのピラミッド（右　クフ王，左　カフラー王）

結びついているのであるが、これは今日のわれわれのものとはまったく違うもので、自然と人間の運命についての彼らなりの深い分析を示しているものである。ファラオの遺体が、ピラミッドの下にしつらえられた玄室に安置されたが、ほかにも別の埋葬用の安置所が囲壁の南側の下深くに埋め込まれた。これは、内臓を納めたカノポスつぼを安置しておくためのものだったのだろうか。いずれにしても、北墓と南墓という二元性はエジプト王制の基本的な性格と結びついており、二重王制は、三〇〇〇年以上の長きにわたって、ファラオは同時に上部および下部エジプトの王であるという事実の表明であった。

ジョセル王の後継者のセケムケトも、同じような複合体を建てようとした。これは最近になって初めて発見されたのであるが、やはり奥行き幅ともに数百メートルの規模を備えていた。しかし、何らかの理由で建築途中で放棄された建造物の構造は建造物を壊したあとの巨大な塊である破片によって覆われていた。未完成のままに残された周壁は、古代のファラオ統治下の労働がどんなものであったかを示すとともに、人間の巧知を示す感動的な証拠ともなっている。剝脱をまぬがれている壁には、今でも建設者たちのしるしが赤インクで記されているのが認められる。人間精神の進歩に関心を寄せ、そして、その進歩を今日に残る大建造物の遺跡のもとに明らかにしようと試みているわれわれにとって、非常に興味深い事柄が観察される。それは、ジョセル王は日干しレンガそっくりに石塊を小さく切らせたが、これに対して、彼の後継者のセケムケトは、それぞれの塊を長さ、幅、高さともに二倍の大きさに切らせた。こうして非常に扱いやすい建築材料にして築き上げていったが、こうすれば八分の一（二×二×二）の取扱い量ですんだわけである。天才イムホテップがいかなる改革者であったとしても、細部では依然として従来のしきたりにとらわれていたのであろう。その天分をもってしても、実際の工程に関しては、綿密な観察と慎重な考察によって進歩させるべき点はまだ残されていたのである。

屈折ピラミッドについて

第四王朝の創始者で、おそらく古代エジプト最高の建

築家ともいえるスネフル王の就任とともに、墳墓の構造に新しい傾向がはっきり認められるようになる。墓自体の上部構造が拡張され、上昇する力をそのままに力強く表現したような形になったが、これはそもそも、不滅の神々がいる御座所に昇りたいというファラオの憧れを満足させるために、イムホテップが考えついたものであった。階段ピラミッドの巨大な階段は、やがて空に向かって直接にそそり立つ、三角形の面をもった紛れもないピラミッドになるのである。爾後、ピラミッドの横顔は、空から直接に来たと思われる二本の直線で——石の中に凝結された太陽自身の光線として——描かれるようになる。それからは、三角形の表象——地球に生命を与えるために神格化された星（太陽）から来た三角形の光線束——をともなった強力な太陽思想が勢力を誇るようになる。この形のピラミッドが最初に建てられたのはダハシュールの南であるが、これは五四度二八分という非常な傾斜をもったピラミッドで、完成していれば高さは一二八メートルに達するはずであった。しかし、石積み工事の途上で生じた狂いによって、すでにできあがっていたところから一一度も傾斜を弱めねばならなくなってしまった。屈折ピラミッドと言われるようになったのはこうしたためである。こうみると、一度計算違いがあって、のちにこれを正したわけであるが、この不完全な形のピラミッドを前にしてもなおかつ、そこには賛嘆の念に打たれて、しばし我を忘れてしまうような、古代エジプト人の完璧さが見られる。つまり、二つの傾斜面の接点における折り目の線は全体としては整然としており、ピラミッドの各面の中ほどにあって、厳格なまでの鮮明さを浮き彫りにしている。

それから、さらに北二キロ足らずの所に、スネフル王は、建築術上の傑作といえる別のさらに大きなピラミッドを建てさせた。ここの内部の玄室は、高さ一五メートルにも達する、驚くほど完璧につくられた持出し構造の円天井を持ち、四六〇〇年以上にもわたって、まったく手つかずの状態に置かれてきた。これらダハシュールの南北両ピラミッドの容積は、三〇〇万立方メートルを超えている。このように巨大な建造物にするためには、どうしても石の寸法を大きくせざるをえず、厚さ一メート

ル五〇センチ、重さはそれぞれ数トンにも達する石を使った。

スネフル王の後継者たちが建てたものが、ギーザにある第四王朝時代の巨大なピラミッドで、世界の七不思議に数えられるものである。これらのピラミッドは、特徴的な名前――これらはヒエログリフで書かれたピラミッド・テキストで確認されているのだが――でもってそれぞれの王との結びつきが明らかにされている。これらの名前は、ファラオの神格化された王の身分と関連させてそれぞれの神格的、厳密には神学上の性格を強調する内容となっている。つまり、「地平線にふさわしきクフ」「偉大なるかなカフラー」、「神々しきはメンカウラーなり」などがそれであるが、それぞれのピラミッドが発する特徴を厳密に追求しても意味がない。どれも正方形の底辺の上に、四つの二等辺三角形が尖頂に向かって集中しているのであり、積み上げられた切石の巨大な塊の表面は、すべすべに磨かれた美しい石でもって化粧仕上げがされ、これ以上に単純なものはないと同時に、これ以上荘厳なものはないというのがピラミッドだからである。これらのピラミッドの途方もない大きさは、ファラオの遺骸、つまり「完全なる神」に、全エジプトが一丸となって保護せねばならぬほどの重要性があったことを証明するものであり、この「完全なる神」のもとで、この地上に、そして同時に来世のためにも、社会（みんな）のピラミッドとして高くそびえたのである。

クフ王の大ピラミッドについて

スネフル王のあとを有名なクフ王が継ぎ、ギーザに大きなピラミッドを建設した。各辺が四四〇クデ（二三〇メートル五〇センチ）の底辺を持ち、高さは一四六・六メートルに達して、ヨーロッパにある大聖堂の一番高い尖塔と比べてもまだ高く（ストラスブールの大聖堂の尖塔でも一四二メートルしかない）、ローマのサンピエトロ寺院のドーム（一三九メートル）もまだ及ばない。とりわけ、内部の土台として使われた石塊は巨大なもので、最初の層として使われた高さ一・五メートルの石塊の組立てと仕上げの完璧さには驚嘆せざるをえない。しかし、これを建てた者たちの努力や創意工夫の才能は、何はともあれ、

玄室への接近を防ぐこと、および部屋や通路を組織的にふさぐ方法の工夫へと向けられた。守りを固めるために、アスワンの花崗岩が使われるようになるとともに、それ以後、斜坑や何本かの入口の通路は、少なくとも部分的には花崗岩の栓あるいは墜格子（おとしごうし）でふさがれることになる。クフ王のピラミッドの玄室に関しては、このピラミッドの仕掛けの特殊な複雑さからして、三つの異なった場所に順次に準備されたと思われる。第二の場所では、玄室は基底から二一メートルの高さのところに、ピラミッドの石塊自体の中にしつらえられた。この部屋にたどりつくためには、はじめの斜坑から昇り廊下をたどらねばならなかった。埋葬式のあと、この廊下をふさぐための花崗岩の栓を保管しておくために、驚くべき「大回廊」が考案されたのである。その円天井は持出し構造で、傾斜も回廊自体の傾斜と平行につくられている。この型式を備えたピラミッドとしてはこれが最終のものになるはずであるし、実際に、これは建築術学上も驚嘆に値する傑作といえるものである。

最後の、つまり第三の場所では、三つの墜格子が切り込まれた入口から水平な廊下が通じている玄室は、花崗岩によって完全に行きどまり状態にされた。部屋の天井となる、さしわたし五メートル以上もある巨大な舗石が何枚か置かれるとすぐに、これらの石に亀裂が生じるようになっていた。これが、それぞれ花崗岩製の舗石の天井を備えた上の五つの重量拡散用の部屋の構造に狂いを生じさせ、次にはこれらの舗石の何枚かに亀裂を生じるようになっていた。最後は、二重の斜面をもった重量拡散用の本物の天井によって、玄室全体は保護されるようになっていた。

数千年にわたって、人間の好奇心や当惑、疑問を引き起こしてやまなかったピラミッドの主要な装置はこのようなものである。「ピラミッド学（pyramido logie）」――絶えることなく常に提出されてきている、非常に変化に富んだすべての提題の集合――とも呼べるれっきとした一つの学問が存在するぐらい、これまでに考えられてきた提題は数多くあるが、これについてはいずれ触れる機会もあるだろう。ピラミッドの探検そのものにも多くの段階があって、先駆者のペリングとバイスは、ピラミッ

ドに関して一八三七年に大部の著作を物している。それから一世紀以上にも及ぶ調査研究が続けられているにもかかわらず、まだ多くの調査を必要としているといえるし、この驚くべき建造物、およびこれを取りまく周辺の本当に正確な見取図はまだできていない。最近では、最高にしゃれた趣向の技術を使ってピラミッドが調査されている。宇宙線の研究でノーベル物理学賞を受けたバークレイ大学のL・W・アルバレス博士によるレントゲン写真を用いた方法などもその例である。センセーショナルな文句をちりばめて、多くの註釈を添えてはいるが、明確な結果を得たとは思えない。レーダーによる調査についても同様である。

これに対して、発掘――偶然の仕業、つまり考古学者が魅せられてやまない妖精――というまったくの伝統的な方法は、根源的な関心を抱かせる発見を行ってきた。ギーザの人の行き来の激しい例の見なれた場所で、しかも長年にわたって行われてきた発掘のすぐわきで、偶然の発見によって一九五四年にすばらしい掘り出し物がもたらされた。それはクフ王のピラミッドの南側ほとんど数メートルのところで発見された、四二枚の巨大な舗石に覆われた一種の乾船渠で、そこには、部分的に分解された木製の船のすべての素材がびっしりと床に並べられていた。完全な保存状態で発見されたこれらの素材は、素晴らしい葬祭用の船として修復され、数千年の歳月を見事に渡り切ったのである。船室の屋根に取りつけた小さな三本の銅製のボルトを除いて、金属の素材は一切使われていなかった。木製の部品は柄と柄穴によって、非常に念入りに組み合わされ、全体としては、船体は縫い合わされるような形になっていた。つまり、きざみ目にそって綱が通されたが、水の影響によって木が膨張し、それによって綱がぴんと張り、水の浸入を完全に防ぐことができた。船体の主要な部品は二〇メートルを超す小梁で構成されており、船尾は非常に優美な咲いた状態の蓮の花で飾られていた。綱と索具もすべて発見された。しかし、白日にさらされるや否や、これらの素材はすべてカビやあるいはネズミ、虫といった寄生物に侵されてしまった。素材自体がよく密閉された環境にあって、完全に保存されていたときに、非常に綿密な保存処置を講

じなければならなかったのである。これらのように、非常に貴重な過去の遺物に人間が触れれば、何らかの不都合は必ず起こるものである。

第五王朝以降のピラミッドについて

ギーザに相次いで巨大なピラミッドが建設された第四王朝に続いて、太陽崇拝を特に重要視する第五王朝時代に、レー（太陽）に捧げられた大きな神殿がアブシールに建てられた。この型の建造物に特有の、石灰岩製の一種のオベリスクを戴く壮大なテラス（平屋根）が目を引くために、現代の考古学者にとっては、いわゆるピラミッドが幾分か影の薄いものになってしまった観がある。しかしその一方では、サフラー、ネフェルイルカーラ、ニウセルラーなどの王たちの巨大なピラミッドも、ちゃんと存在しているのである。第一次世界大戦前にドイツ隊によって調査研究が行われたが、現在ではチェコ隊が第五王朝のピラミッドや葬祭殿の研究に従事している。考古学上の研究というものは国際的性格をもった科学的事業であって、研究開始当初は民族主義的な意向をもっていたとしても、いとも簡単に超越してしまう性格のものであり、どんな組織であっても、そのねらい以上のことを容易にするものである。それぞれに果たすべき特殊な任務を負うているかぎり、どんな研究所でも大学でも、発掘あるいは研究の企画を決めることはできる。しかし最終目的は、普遍的ですべての人が認めるような形で、ファラオ時代の文明を理解させることである。

遺跡が比較的よく保存されているのが、これがまた、耕作地や居住地からも離れたアブシールの砂漠の中で、ここでは葬祭に関連した建築物の全体の配置が非常によく明示されている。というのは、今まで見てきたピラミッドは、途方もない図体をしているが、それ自体は非常に広大な葬祭複合体の一部分にしかすぎないのに比べて、谷の耕作地のはずれに、低地に沿って河岸神殿すなわち歓迎の神殿が建っていたりしている（葬列は最後にはここに行きつくことになっていたが、それはミイラづくりの儀式のために、ファラオの遺骸はここに七〇日間置かれることになっていたからである）。一本の非常に長い道――通例平屋根で覆われれている――が、砂漠の

断崖の縁に沿って、ピラミッドの東側の側面に建てられた、それ自体も大きな規模をもった葬祭殿に向かって昇っている。同じく北側には小さな祠堂があって、ここを起点として埋葬の間の方へと斜坑が通じている。また、ファラオの太陽を伴った来世への旅を示唆する船の描かれた場所や、付属のピラミッド――南（上部エジプト）の墓所を象徴するピラミッドや王妃のピラミッド――、さらには、数多くの施設がこのほかにもある。

第五王朝最後のファラオのウナスや、第六王朝のファラオたちの時代になると、ピラミッドはより小さなものになっていくが、それでもまだ六〇メートルの高さがある。しかし、信仰や来世での蘇生の希望は相変わらず熱烈である。遺体を守ってくれる石の山が小さくなればなったで、それ以後は、希望や庇護はまったくほかの方法――聖句によったり、御言（みことば）の力によって表明されるようになる。それまではむきだしにされたままだった埋葬の間の壁は、墓碑銘で覆われるようになるが、これらの銘は、いくらかの字句の違いを除いては、王が変わっても、同じことが繰り返し述べられている。これがピラミッド・テキストと言われるもので、死んだ王と来世での彼の生命に供せられるきまり文句一式をその内容としている。

サッカーラにおけるピラミッドの調査研究

サッカーラにある古王国時代末期のピラミッドについて、もう少し詳しくお話したいと思う。というのは、二〇年このかた、私が研究グループを率いて、毎年数か月ずつ発掘活動を続けてきたのがこの場所だからである。今から一世紀前の一八八〇年に、当時はまだ若い学者だったが、有名なエジプト学者のガストン・マスペロがエジプトにやって来てすぐに、サッカーラの南部地区にある幾つかのピラミッドの内部にテキストが記されていることを明らかにした。当初、カイロの考古局総裁で、経験、学殖ともに豊かだった偉大なオーギュスト・マリエットはこの解釈を疑った。しかしやがて、死の床にいて（彼は一八八一年一月一八日に死んだ）、若き同学の士の主張が正しいことを認めねばならなかったことだろう。このことは、これまで信じられてきたことに反して、ピラミ

ッドは物言わぬ物体ではなかったことを証明している。憑かれたように、ときには命がけで、マスペロは長い竪穴や廊下から、掘ったあとの巨大な石塊を取り除いていった。彼は墓室の方へと深く入り込んでいったが、途中、壁に描かれたテキストのうち、近くまで寄って見られるものは写し取って翻訳し、出版もした。最初に翻訳書付きでピラミッド・テキストが出版されたとき、人々はしばらくはどう解釈してよいかわからなかった。というのは、はなはだしく難解な墓碑銘だったからであるが、それは、複雑な記号文字をまじえて、全く意味不明な文句を含んだ古風な言語で書かれているうえに、非常に断片的でもあった。これに続いて、ドイツ人クルト・ゼーテによって、学問的な裏付けをもった定本として再版された。このピラミッド・テキストは、エジプト学にとっては今なお基礎的な資料となっているもので、資料とした文書が起草されるずっと前の時代の概念も含めて人間の最も古い宗教上の構図を示してくれている。ピラミッド・テキストは、そもそも、ファラオの蘇生をたしかなものとすることを狙いとして書かれたもので、これは、文字通りくどいほどの意志の繰り返しという形式をとって、あらゆる手段によって、激しく迫るような調子で書かれている。しかし実際には、時代も非常にさまざまで、役目も異なったきまり文句を集めたものとなっている。ファラオというものの存在は、非常に変化に富んだ形式をとって示されうるもので、ファラオの遺体の埋葬をとってみても、単に砂の中に埋められてさえいた状態から、レンガでできたマスタバ墓の中に置かれる段階を経て、石のピラミッドの下に安置される形式へと変わってきたものであり、ファラオ自身に与えられた性格も、オシリス神としての再生（ファラオは地下界という暗黒空間の王）、太陽としての上昇（天空を航海するレーの船の仲間としての王）、輝く星のもつ永遠性（一つの星として、周極星の間にあって果てしなく輝く王）とさまざまである。

次に、昇天にまつわるテキストを紹介してみよう。ここではオシリス神と太陽の二つの動きが結び合わさっていて、オシリス神にならって復活した王は、レーの船に乗って天空へと昇っていく。

お前の心臓がお前のものであらんことを、オシリスよ、

お前の脚がお前のものであらんことを、オシリスよ、
お前の腕がお前のものであらんことを、オシリスよ。
王の心臓が彼自身のものであらんことを、
彼の脚が彼自身のものであらんことを、
彼の腕が彼自身のものであらんことを。
彼のために、天空への階段が架けられんことを、
それによって彼が天空に昇るために、
そして、彼が大撒香の煙の上に昇るために。
この王は鳥のように飛び立ち、
彼はこがね虫のように止まり、
彼は鳥のように飛び立ち、
彼はこがね虫のように止まる、
船の中の空いた玉座の上に。ああ、レーよ。
立って遠ざかれ、ああ、あしの茂みを知らざりし者よ。
この王はお前に代わって、
お前の船にあって天空に向けて櫂を操っている。ああ、
レーよ。
この王はお前の船に乗って地球から遠ざかっていく。
ああ、レーよ。

汝、お前は水平線上に姿を現わし、
そして彼の王、彼は手の中に自分の笏をもっている、
それはあたかも、お前の船の中に乗り込んだ船乗りの
ようだ。ああ、レーよ。
お前は天空に昇り、そしてお前は地球から遠ざかって
いく。

違った種類のテキストもほかにはある。つまり、ある時には、いわば実際に故人が捧物の配分にあずかったり、祭祀に参加したりするかと思うと、またあるときには、死体から離れた霊に独自の境遇を認めているふしもある。しかしまた、死体の清め、燻蒸、塗油、着衣、奉納の効用への言及も数多く見られる。このことは、テキストの中のあるものは、埋葬や奉納の儀式のときの吟唱のために書かれていたことを示しているともいえよう。また一方には、荒れ狂う雄牛あるいは危険なヘビで言い表わされていた悪の力に対する呪文を内容としたテキストも見られる。

ここで私はみなさんに、われわれの作業班が経験した考古学上の冒険を再現させてみるとともに、考古学者の

仕事の中味について、具体的に示してみたいと思う。すでにお話したガストン・マスペロは、一世紀前に容易に近づけるところにあったテキストへの道を切り開いて写し取り、それらを直ちに世に送り出した。しかし彼は、建造物が崩壊していく過程で積み重なった石塊や破片などの膨大な堆積物を取り除くことはできなかった。われわれが企てたのは、この大規模な土石の取り除きという危険な仕事だったのである。これには、すわりが悪いうえに重なり合った石塊の中にあって、片っ端から土台を固め、支柱で支えておいて障害物を除去し、内部へ進むという鉱夫のような方法をとらねばならなかった。墓室を覆い隠す杉綾模様の舗石――一個で三〇トンほどもある巨大な石塊――が砕かれ、何万という塊りや破片がピラミッドの奥底から掘り出され、作業者が横に長く並んでの手渡し作業によって、それはわれわれの倉庫に運び入れられた。もちろん、これらはすべてわれわれにとって非常に興味のあるものであったが、そのなかには墓碑銘が描かれているものが数千個含まれていた。これらは目録に記載され、分類され、摸写（実物大のトレースを五分の一の方眼図とに）され、写真に記録され、そして研究された。もともとは間仕切壁であったものの一部が――その多くは、マスペロが手に取ることはもちろん見ることさえもできなかったものであるが――非常に綿密なトレースをもとに、方眼図として作成された。この膨大な材料すべてを碑銘学的見地から研究することによって、崩れた間仕切壁の個々の破片を、それぞれ正しい位置に置くという大規模なパズルは、少しずつではあるが解き明かされていった。いってみれば、紙上にテキストを再編成するようなものであった。では、これらの組み立てはどのように行われたのであろうか。われわれはどんな種類の手がかりも考えに入れなければならない。たとえば、石塊の形、寸法、種類、欠け口の形、墓碑銘の色などであるが、テキストの配列や意味も考慮せねばならない。というのは、土石を除去したり、坑道を支えたりするために建築の知識をもたなければならないと同時に、文献学者としてテキストをも理解しなければならないからである。こうして、第六王朝のピラミッド――これらは、古代エジプト人の信仰に従ってその名前（テティ、ペ

ピ一世、メルエンラーなど）を確定しつつわれわれが蘇生させたファラオたちのピラミッドであるが――のテキストの大規模な出版が少しずつ準備されていった。テキストの摸写と再編成という仕事と並行して、ピラミッド・テキストの書法上および文法上の特色に関する調査研究も続行されていた。というのは、とくに人間や動物を形どった象形文字は生命を与えられた文字であり、エジプト人は呪術によってこれが再び生き返ることができると考えていた。また、これらの記号が、いわばファラオにさからったり、来世でファラオを不利な立場に置いたりしかねないようなことは避けなければならなかった。こうして、人間あるいは人間の体の部分を表現する記号はできるだけ使用を避けるか、あるいは害のないものにされた。つまり、「houi」（打つ）という単語を表記する場合に、その一部を構成する武装した人間は腕ではなくて、単に棒によって表わされた。このように使用が禁止されていたのは、雄牛やヘビなどの動物にも及び、ライオンの体は二つに切られている。ペピ一世の前室の東壁に描かれた、ライオン、牛、さらに象かさもなければキリンの絵は特に入念に仕上げられた。つまり記号の輪郭全体が彫り刻まれ、ついでうしろ半分に念入りに石膏が塗り込まれ、前半分だけが彩色されている。こうして、時として恐ろしい動物は、書法上の約束事と呪術に基づいた身体毀損に関する約束事に対して同時に適うように象形化されているのである。

これまでに述べてきたことや、引き合いに出した例によって、考古学的冒険の多様性や内容の豊富さについて、具体的にみなさんに示せたと思う。もちろん、これは非常に忍耐のいる仕事で、われわれも二〇年にわたって調査を続けている。この間に蓄積された記録も膨大なもので、出版物も次から次へと世に出してきている。しかし、とはいっても、みなさんはわれわれ作業班の熱狂ぶりについてももうご存じのことだろう。私が列挙したテキストの摸写や再編成の仕事と並行して、言語学の面からピラミッド・テキストの書法上及び文法上の特色に関する調査研究も続けられてきたことを、付け加えておかねばならない。考古学の側から、われわれはまた、ペピ一世の葬祭殿の土石塊の除去という大がかりな作業を進

めてきたが、これはメンフィス地方で最も敬われた聖域の復興を意味している。というのは、ペピ一世の正式名は Pépi-men-nefer（ペピはこの上なく永く続いて揺がない）といい、自分の名前を町の名（メンフィス Memphis はギリシャ名で、古代エジプト時代には Men-nefer と呼ばれていた）にしたほどだからである。

スーダンのピラミッドについて

さて、いま少し考古学上の具体的な経験をふまえて、大建造物にじかに接した上での見聞や地上の調査研究を紹介するために、みなさんとともに、何世紀いや数千年もの時間を一気に飛び越え、ナイル流域をはるか南にさかのぼり、まだよく知られていないスーダンのピラミッドへと案内しようと思う。紀元前十世紀の初め、エジプトが分裂し、衰弱しきっていたいわゆる第三中間期と呼ばれる時代に、はるか南の地ナパタ――ナイル川の第四急流のやや下流、聖なるゲベル・バルカル山のふもとの町――に一つの強国が勢力を張っていた。エチオピア朝と呼ばれていた時代の紀元前七三〇年ごろに、ペイェ王（ピアンキ王ともいう）はエジプトを征服した。しかし、彼が死んだのはスーダンの地で、遺体はエル・グラの先祖の墓地に埋葬され、墓の上にはピラミッドが築かれた。それ以後、クシュの王たちの墓には、急勾配の、比較的規模の小さいピラミッドがそびえるようになる。それというのも、手本にしたのは、古王国時代の大ピラミッドではなくて、新王国時代のエジプトおよびエジプト人の支配下に置かれていたヌビアにおいて、有力者たちのために建てられていたピラミッドだった。クシュの支配が続いた紀元前七〇〇年から紀元三〇〇年の一〇〇〇年の間に、こうしてスーダンにたくさんのピラミッドが建てられることになるが、幾世紀にもわたる崩壊にもめげず、皮肉にも今日、ナパタやメロエが、本来なら敬意を払われてしかるべきエジプトよりも、多くのピラミッドを保存していることについては、大いに誇ってよいだろう。スーダンのこれらのピラミッドは一九一六年から一九二五年にかけてアメリカ人のG・A・レーズナーによって発掘され、研究が進められた。最初の段階では、クシュ王国はゲベル・バルカル山のふもとのナパタに本拠

メロエのピラミッド（L'Égypte du crépuscle, 1980 による）

を置くが、五世紀以降は南のメロエに都が移される。熱帯の太陽のもと、まさに太陽に焼かれる広大なピラミッドの原は忘れがたい光景を呈してくれている。メロエの南墓と西墓には、王たちの墓の外側に要人たちの墓が建てられている。紀元前二四〇年ごろに、新しく北墓が開かれているが、紀元四世紀まで、ここがメロエを本拠とするすべての王たちの埋葬場所にされる。一八三四年に山師のフェルリーニがしたように、財宝をあさり歩く人間たちが墓の上層部をはいでなくしてしまった。淋しいことであるが、しかしそれなりに、この墓はクシュ王国のかつての名声を示すものとなっている。メロエを都としていた時代のほかの、とくにヌビア地方の都市の墓は、その上部にマスタバではなくして、やはり日干しレンガによるピラミッド構造を備えている。実はこれはカラノグやアレイカなどの町の墓では、長い間マスタバ墓であると信じられていたものである。五年来、われわれはセデインガの墓地の発掘を手がけている。ピラミッドは不幸にして、一様に切り落とされてしまっているが、それでも脇の斜面は十メートルにも達しようというもの

だった。これらのピラミッドの東面には小さな祠堂が設けられているか、さもなければ、一部分、中がくり抜かれていて小さな部屋がしつらえられていた。祠堂の小さな入口のかまち（戸の周囲のワク）にはアヌビス（死者の神）の略像が飾られ、まぐさ（窓・戸の上の横木）には溝つきの帯状の装飾がつけられていたが、これには翼つきの太陽の円盤が添えられていた。このほか、献納物用の卓、鳥の形をした霊であるバーの小像、陶器の数々などによって、メロエ時代のクシュ王国によって生み出されたアフリカ・エジプト芸術は、いっそう興味深いものとなっている。

これまであまりにも知られることが少なかった、幾つかの記録にみなさんの注意を向けていただこうと思ってこの歴史上の小旅行を試みたわけで、どうかその意図を了解していただきたいと思う。なお、エジプトについての概念がピラミッドというテーマと強く結びついていてローマの法務官ケスティウスはキリスト紀元ごろに、ローマにおいてさえピラミッドを建てさせたほどであった（今でもオスチアへと通じるポルタ・サン・パオロのそばに見ることができ、ケスティウスのピラミッドと呼ばれている）ということも付け加えなければならないだろうし、ヨーロッパの墓地では、今日でもまだ、墓にピラミッドを建てさせるほどの「エジプト狂」も時として見られるほどである。

ピラミッド学について

これまでじかに見てきたために、みなさんは、ピラミッドが単にエジプト古王国の非常に光栄に満ちただけの存在でないことを、知ることになるだろう。しかし、みなさんがこれらの驚くべき大建造物について抱いた、いくつかの疑問に答えるために、ここでもう一度ピラミッドに戻る必要がある。この際、作り話とか空想はそれとして、幾つかの事実について説いてみたいと思う。というのは、事実そのものに限定したほうがよいことはよくあることで、この場合にも、事実ははるかに作り話に優るし、実際の問題は、「苦心の作」と呼ぶべきものよりずっと興味深いものであるからである。

最初にも話したように、ピラミッドは、ピンからキリ

まで、実に多くの頭で考えただけの理論を生んできた。「ピラミッド学」と称されるピラミッドについての一種の擬似科学も生まれているが、この場合には、ピラミッドといってもたいていは一番大きなピラミッド、ギーザにあるクフ王の巨大なピラミッドだけを対象としたものである。これらの理論にあって主に追求されることは、「ピラミッドという宇宙の建築家」の残しているさまざまな教えで、中には非常に神秘的な色彩の濃い学説もある。ピラミッド学が聖書学者の原点をなしていることがよくあって、アダム・ラザフォードの『ピラミッド学』*Pyramidology*（全四巻、一九七二年出版）という概論書の中でも、「大ピラミッドと聖書は同じ原型を再現したものである。一つは言葉で、一つは石で」と述べられている。神智主義的な学説では、大ピラミッドとエジプトの「神秘」との間に一つの関係を仮定している。エジプトの宗教の中に「神秘」が存在していることは否定できないだろうが、その本質を明らかにするには、慎重さとともに十分な裏づけが必要とされるだろう。今までに読んだこの種の著書は、ほとんどの場合、「死者の書」あるいは似非語原説からの、肝心な部分を欠いた引用をもとにでっちあげられたもので、縦横無尽に展開されるこのうえない巧妙さ、というよりむしろ無邪気さには恐れ入って、しばし呆然としてしまうほどである。

ほかには、科学的、天文学的あるいは数学的観察に根拠を置く学説もある。最も知られているのは、何といってもスコットランドの王室付き天文学者ピアジィ・スミイスの説である（*Our Inheritance in the Great Pyramid* 1864）。しかしこれも、たとえば寸法などほとんどが信用できないことは、誰が見てもすぐにわかることで、ものの大きさについて述べたところでは、ある独断から生じた両極端の定義も見られる。また、遺物の保存は不完全で、非常なむらもある。第一、一クデの長さを〇・五二四メートル（正規の長さは〇・五メートル）と換算し、それを根拠として展開された仮説にはどんな意味があるのだろうか。しかしそのなかにあって、アベ・モルーは現代の批判にも耐えられる業績を残している。われわれは古代エジプト人の知識を不当に低く評価するわけにはいかないのだろうけれども、だからといって、アン

ドレ・ポシャンが言うような、ファラオたちは地球が球形であることを知っていたとする説（*L'énigme de la Grande Pyramide*, 1971『ピラミッドの謎はとけた』大陸書房、昭和五十七年）を認めるべきなのだろうか。

ピラミッドについて客観的に、綿密に観察してみると、たしかに、これらを建てた人たちの技術、学識、信仰に関してもっとよく知ることができるはずである。彼らの用いた手法は新石器時代にすでに人類が獲得していた技術であって、のちに金属によってもたらされたさまざまな可能性はほとんどといってよいほど利用されていない。つまり、ピラミッドの内部にもこまごまとした工事箇所はたくさんあって、そういうところには、その機能や用途から考えて、木材や日干しレンガを使用したほうがよいと思われるのであるが、それでも彼らは石を用いているのである。全般的に見て、道具類の遺物はきわめて少なく、仮説で満足せざるをえないことは数えきれないほどである。ファラオ時代のエジプトが、秘密のベールにつつまれた文明であることを忘れてはなるまい。権力ないしは権限をもった人間だけが、ある場所に奥深く入ることができたことは明らかで、この意味において、エジプト文明には「秘伝を伝授された人間」の文明といえる性格があると言いえよう。最大の問題は、ひとつには、言うまでもなく石の運搬とあのような高みまでの運び上げで、これには簡単な道具や技術、すなわち、斜めに上下するエレベーターのようなもの、ローラー付きのソリの使用や、ピラミッドへ通じる道への塗油などが行われていた可能性がある。湿った粘土の上では石はいとも簡単に滑るが、本当にむずかしいのはむしろ横滑りしたのをもとにもどす作業である。L・クルーンは異議を唱えているが、石塊を引き上げるために、作業の進行に応じて上へ上へと伸びていった一直線の長い斜坂を使用したことは考えられうる。しかし、それでも、ピラミッドの四面に際限なく石を運び上げて、そのままにしておくわけにはいかない。おそらく、ピラミッドの各面に沿って上へと続く、正図形の渦巻状の長い斜坂が考えられたことだろう。しかしこれらの問題とは別に、ピラミッドの建造過程では、次から次へと続く引き上げ作業の進行を、完全に管理しておく必要もあったわけであ

る。

ピラミッドのような大きな事業では、経済、政治、社会のすべての面にわたって問題が起きることを覚悟せねばなるまい。つまり、時間、建設資材、労働力(農閑期に人手を使うことを考えついた)、作業の計画と編成(労働者を国中からかき集めることだけでなく、その宿舎や食糧の補給)などの問題である。昔の著述家たちもこの問題に注意を向けていて、ヘロドトスは「ピラミッドにはエジプト文字でもって、労働者にわさび大根、たまねぎ、にんにくを支給するために要した金額が記されている」(『歴史』巻二の一二五)と述べている。もちろん、こんな原文が存在していたという可能性はまずないのだが、彼がわざわざ書き記すということは、これが忘れ去ることのできない問題であることを示しているといえよう。

大量の労働者を使うことで機械類の不足を補っていたとか、広大な労働キャンプをひらいて整備させねばならなかったとか、これらの群衆すべてが、互いにぶつかり合わずに索を引くようにしなければならなかったとか、多くの労働者の強制的で多様な作業を適切な命令のもとで行わせるのが一番よかったなどと、言葉で簡単に言われてきたが、これはもっともなことで、それというのも、クフ王のピラミッドだけで七〇〇万トン以上、つまり、一〇〇〇トン積んだ列車で七〇〇〇列車分、一〇トン積みトラックで七〇万台分あるとはとても思われていなかったからである。有名なエジプト遠征のとき、ピラミッドに仰天していた士官を前にしてナポレオンは、ギーザの三つのピラミッドの石塊を使えば、高さ三メートルの石垣でフランス全土を囲うことができるだろうと、計算してみせた。「エンジニアリング」とか「マネージング」——企業の調査部あたりで使うこの英語の表現をあえて使うが——に関する最も近代的な分析方法を、これらの古い時代について考古学が提供してくれる実際のデータと比較しながらではあるが、ピラミッドの建立が提起してやまないさまざまな問題の検討にあてはめてみるのもそれなりの意味はあるだろう。ポーランド建設構造機械化研究所が、人類史に残る最も壮大な事業の中から幾つかを選んで研究委嘱したときに、その対象の一つとして取り上げられたのがピラミッドである(V.Kozinski

著、*The Investment process Organization of the Cheops Pyramid*, ワルシャワ、一九六九年)。

古代エジプト人の数の知識に関することであるが、ピラミッドはいわば必要なものを寄せ集めた結果、今あるような姿になったもので、それはギーザのピラミッドか、あるいはもっとよい例かもしれないが、北ダハシュールのピラミッドをじっくり見れば十分に納得できるだろう。古代エジプト人は、直観的かつ功利的な安っぽい経験主義を、はるかに超越したところにいるのである。一見単純に見えるが、その実むしろ複雑な比例が当時すでに多く使われていたのである。彼らがなしとげた驚くべき結果を前にするとき、たとえ明白に証明されなくとも、数学的、天文学的に確固とした根拠があるということを明かさないでいることは、個人としてはむずかしいように思える。もしこれらの根拠がないとするならば、エジプトの奇蹟はさらに大きくそして神秘的なものになってしまうだろう。古代エジプト人の発見したものとして、(斜辺にはさまれた角が直角である)直角三角形は容易に思いつくが、それだけでなく「フィボナッチの数列」(1、3、4、7、11、18、……のように、各項が前の二つの項の和となって無限につながっていく数列のこと)のような公式や、円周率や黄金数(メトン周期の何年目に当たるかを示す数で、西暦年数に1を加えて19で割った残りの数。復活祭の計算に便利なので教会暦に採用された。中世教会暦にこれを金文字で表記したのでこの名がある)も発見していくのである。

神々しいまでに見事なピラミッドについての調査に結論を出さなければならないが、これは人類の基本的な問題に関わる事柄である。この神聖にして堂々たる建造物は、いってみれば、「計算された大胆さ」をもったものである。というのは、これらは宇宙のリズムに合わされているからであり、いわば宇宙のなりたちに符合しているからであり、このような完璧さを自らの中に具現しているのがピラミッドだからである。結論として、人類がなしとげえた稀れともいえる成功が、もし完全に規正された社会組織による見事に組織化された勤労や労働の、並はずれた意義を示すものであるとするならば、それは本質的には神——時として奇妙な光を放つ詩であるピラ

ミッド・テキストに生命の息吹きを吹き込みもしたのであるが――への憧れのなせるわざである。永遠の存在のために、信仰の山そのものであるピラミッドを建てることができたのは、それが理想であるからである。

〔訳者あとがき〕

本稿は、一九八三年九月十日に行われた聖教文化講演会での講演原稿である。たまたま、私がルクラン博士の日本滞在中のお世話係の一人であった縁で、この翻訳を依頼されたものと思う。

ジャン・ルクラン(JEAN LECLANT)博士は、一九二〇年八月八日生、コレージ・ド・フランス教授、文学博士。専門はエジプト考古学で、サッカーラ、ヌビアをはじめ、エジプト各地で発掘調査を実施し、その実証的研究は、きわめて高く評価され、世界的なエジプト考古学者の一人として位置付けられている。著書、編書、論文は多数で、お付合いをはじめてから、私に送られてくる博士のあたらしいペーパー類はあとを絶たない。

博士は、昨年の八月から九月にかけて、わが国で開催された第三十一回国際アジア・北アフリカ人文科学会議に出席された。この滞在期間中に、セミナーの座長、研究発表は勿論のこと、早大、古代オリエント博物館、富山大学、平安博物館、聖教文化講演会などで、それぞれ講演をもたれ、さらに、東北地方や北海道の各遺跡の見学など、精力的に日程を消化された。この間、一ヵ月ほど、私は博士と行動を共にしたが、その温厚篤実な、気さくな人柄に魅せられたのは私だけではなかった。

本稿は、博士の最も得意とするピラミッドに関する概説であって、深く、広い学識と野外考古学者としての豊富な体験が盛り込まれた講演用原稿である。博士は、この原稿をもとに、さまざまなコメントを付け、また多くのスライドを用いて聴講者を魅了した。したがって、それに匹敵する多くの訳註や図版が必要にちがいない。しかし、それを行うと、余りにも膨大なものになってしまうので、ここでは、敢えて地図と有名なピラミッドの写真を掲げるのに止めた。今や、わが国においても、ピラミッドへの関心は高く、大小さまざまの解説書、翻訳書などが書店の店頭を飾っているこのような折、現役の第一級の研究者のピラミッド論を紹介できたことは、訳者として大きなよろこびである。

訳出にはかなり苦労したが、友人の小池辰夫氏の全面的な応援、早大文学部の加藤民男教授、古代エジプト調査室の諸氏の協力を得て、ここにまとめることが出来た。厚く感謝の意を表する次第である。

(さくらい きよひこ・早稲田大学教授)